

西洋近代主義と音楽

～ 「芸術」というイデオロギー、その誕生の背景と限界

(18世紀～1950年代頃)

サウンドデザイン演習
女子美術大学 石井拓洋
ishii05042@venus.joshiabi.jp

2014

Open Campus 公開講義用

「今日われわれが普通に使用している『芸術』という概念は
もともと西洋の近代社会において成立した概念である」

[村田誠一 1999 : 242]

「その芸術概念とは、、、

道具のもつ実用的価値（有用性）や

宗教、科学、道徳などの他の文化的諸価値から区別された、、、

美的価値といわれる芸術固有の価値をもつと同時に、

固有の法則性や課題をもつ自律的な芸術といわれるものである」

[村田誠一 1999 : 242]

「ヨーロッパの『近代的』芸術観において、、、

創造性こそは芸術家の本質をなしている。

だが、歴史を振り返るならば、キリスト教的伝統においては

『創造する』という述語はただ神にのみ帰せられ」るべきものである。

「とするならば、創造する主体としての芸術家と言う概念の成立には、

芸術家が何らかの仕方で神と類比的な存在として捉えられることが必要であった、

という予想が成り立つ」

[小田部 2001, 19]

近代 modern age

- 歴史の時代区分の一。
広義には、、、封建制社会のあとをうけた 資本主義社会についていう
（『広辞苑』「近代」より）
- 封建制に反対して近代的自我の確立など近代化を追求する立場 → モダニズム
（『広辞苑』「近代主義」より）

※ 上記から、18世紀半ばの「市民革命」以降が近代といえる

- 1970年代ごろより ポストモダン論が興隆し、近代を超える新しいトレンドが注目される
（『岩波哲学・思想事典』「近代化」より）

※ 上記から、1970年代以降は「近代」とは異なる時代（＝「現代」）といえる

本日の話の流れ

本日の話の流れ

1. 「啓蒙思想と近代芸術」

～ 近代芸術の誕生の背景、そしてその「芸術」の特徴とは？

2. 「啓蒙思想への懐疑」

～ 近代主義の問題点とは？ 「人間中心主義」批判から

3. 「近代芸術の帰趨」

～ 「近代芸術」の限界とは？

1. 啓蒙思想と近代芸術

18世紀のヨーロッパにおいて

「神に捧げるためでもなく、

王侯を賛美するためでもない、

『市民による、市民のための、市民の心に訴える音楽』が、
初めて生まれたのである」

[岡田 2005 :96]

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



ロ可可様式

Rococo Style (前史としての話)



D.ツインマーマン設計 「ヴィース巡礼教会」(1745頃) (ドイツ)

ロココ様式 Rococo Style (前史としての話)

- ロココ音楽

バロックの後、古典派音楽の前。

ルイ15世の時代(在位 1715- 1774)

装飾的表現、優美・軽快、貴族的・フランス的

代表的作曲家 フランソワ・クーブラン(1668-1733)

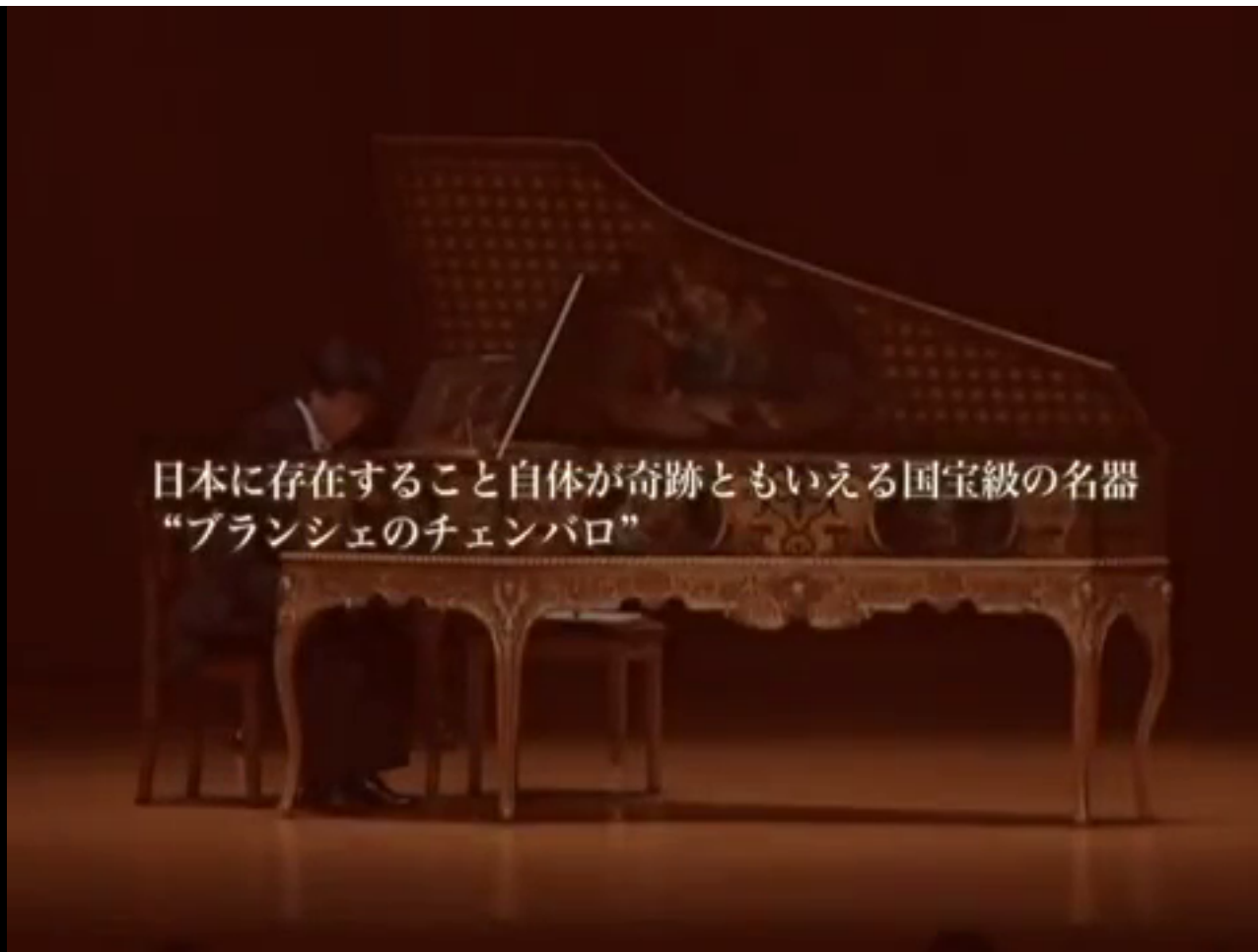
- フランスのルイ15世時代の宮廷作曲家

- ギャラント様式

- ロココ音楽の代表作に「クラウザン曲集 1巻～4巻」(1720年頃)

<http://ml.naxos.jp/album/fl23090>

(試聴: NAXOS Music Library より)



日本に存在すること自体が奇跡ともいえる国宝級の名器
“ブランシェのチェンバロ”

ロココ音楽 Rococo Style Music の例 (映像: 3分程度)

Youtube 「【中野振一郎氏演奏】18世紀フランスのチェンバロ / Blanchet Harpsichord」より

(この映像内での曲目)

1. ジャック・デュフリ 《クラヴザン曲集 第2巻》より 〈ラ・ヴィクトワール〉
2. フランソワ・クープラン 《百合の花ひらく》
3. ジャック・デュフリ 《三美神》

啓蒙思想とは

啓蒙思想とは

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
- 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
- 理性的思惟によって**宗教的権威**や**王侯貴族**に抵抗した
- 政治、教育を通して人間生活の**幸福の増進**を理念とした
- 基本的人権 (自然権 = 人が生まれながらに有する権利) の萌芽

「キリスト教・王侯貴族」のためから、「**市民**」のための生活へ

啓蒙思想 → 市民革命(フランス革命)

- ・ 絶対主義を解体させて、近代に特有な「市民社会」を実現させる革命 (18世紀後半 = 1790年代)
- ・ ここでの「市民」とは？
 - 国政に参加する国民。国の形成に自律的・自発的に参加する人。
 - 市民 = ブルジョアジー (非貴族 = 大土地所有者、資本家、高級官吏)
 - 近代国家における象徴的存在
- ・ 「宗教的権威」と「王侯貴族」からの人間の自立 (近代のはじまり)
- ・ 基本的人権の確保 (言論・表現の自由)
- ・ 「自由、平等、友愛」のスローガン

※ 近代的な「**芸術**」の誕生をうながす
契機となった「フランス革命」(市民革命)
の様子を、映像で観ておきたい。

テレビ映画作品 『王妃マリー・アントワネット』(2006)
(フランス制作, 抜粋 12分程度)

(※ ソフィア・ Coppolaによる映画よりも見応えがある!?)



テレビ映画作品 『王妃マリー・アントワネット』 (2006, フランス制作, 抜粋12分) ※ DVDでも出版されている

啓蒙思想 → 「芸術」(近代芸術)

「人間が世界の主人となるということは (※ キリスト教世界では)
人間がみずから神に代わる存在となることを意味する」〔松宮：80〕

「『芸術家』とは理念的にはみずから神となつて、自己の作品を通じて、
歴史と社会がいまだ発見しえなかつた新しい価値を創出する
『創造者』となることである」〔松宮：67〕

啓蒙思想と「芸術」 (近代芸術)

啓蒙思想と市民革命を経た近代において、

ヨーロッパは、18世紀に至り、ついに、

個人における個性的な創作としての芸術が誕生する基盤が整う。

つまり、この時期にいたって、

現代の我々が考える一般的な意味での
「芸術」が生まれはじめる。

「自分のための表現」 & 「創造性の開示」としての「芸術」

「芸術」の誕生（18世紀の西欧）

「『芸術』という概念がヨーロッパの芸術理論において確立したのは、十八世紀中葉から末葉にかけてのことである」

「十八世紀中葉以前には、今日われわれが『芸術』と呼んでいるものを〔略〕指し示す概念ないし術語は存在しなかった」

「『芸術』という概念は「近代」の所産にほかならない」

※上記全て [小田部 2001: 3]

啓蒙思想の特徴（「近代芸術」の特徴）

- **西洋中心主義**

西欧のあり方を普遍的なものとする考え。また男性中心主義にもつながる。

- **要素還元主義**

分類し、可能な限り細部に切り分けることで、物事の〈本質〉をすることが出来るとする考え
芸術の「本質」をさぐるために、他の表現要素にたよらない〈自律的な芸術〉への志向にも。

- **進歩主義**

新しいものは良く、古いものは良くないとする考え。
われわれは、〈真理〉に到達する歴史上の過程にいるという考え。

- **人間中心主義**

人間の理性によって自然を制御して〈真理〉に到達しようとする考え

市民革命と「展示」

- ・ フランス革命以後「ルーブル美術館」の前身ができる。

「ミュゼ・ドゥ・ラ・ルピュブリック」

(フランス共和国中央芸術博物館)という名の美術館が開館 (1793)

- ・ 「万国博覧会」が始まる (パリ)

万国博覧会のルーツ「国内博覧会」(パリ, 1798) = 様々な物品を集めて展示する博覧会
1849年までにパリで11回開催

- ・ 文化芸術の担い手が、王侯貴族から「市民」へと移行

自律化する「近代芸術」

自律化する「近代芸術」

- **じりつ【自律】**
 - 自分で自分の行為を規制すること。外部からの制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること。[広辞苑]
- 「西洋の近代藝術を規定している根本動向は自律化・純粹化の運動であると言われる」[国安：30]
- 啓蒙思想の「**本質主義・還元主義**」のあらわれ
- 〈唯一絶対の真理の本質〉をより純粹な形で呈示しようとする
- **主体性・独自性・創造性を尊ぶ、人間中心主義のあらわれ**

自律化する「近代芸術」

- ・ 「自律化・純粹化」を目指すとは、芸術が**芸術の外の諸規定から自由となり、自分自身で成り立つ自立した存在となること。**

古典派音楽の特徴

2 音楽的特徴

- ・他の要素に頼らない**自律的な音楽表現**を追求 → 声楽から**器楽**へ
- ・オペラ、協奏曲 から → **ピアノソナタ、交響曲、弦楽四重奏曲**へ
- ・宮廷音楽(王様のための音楽)から → 個性を表現する音楽の萌芽
- ・対位法の様式(旋律の重なり)から → 和声音楽へ
- ・「自律的な音楽」の形式としての「**ソナタ形式**」

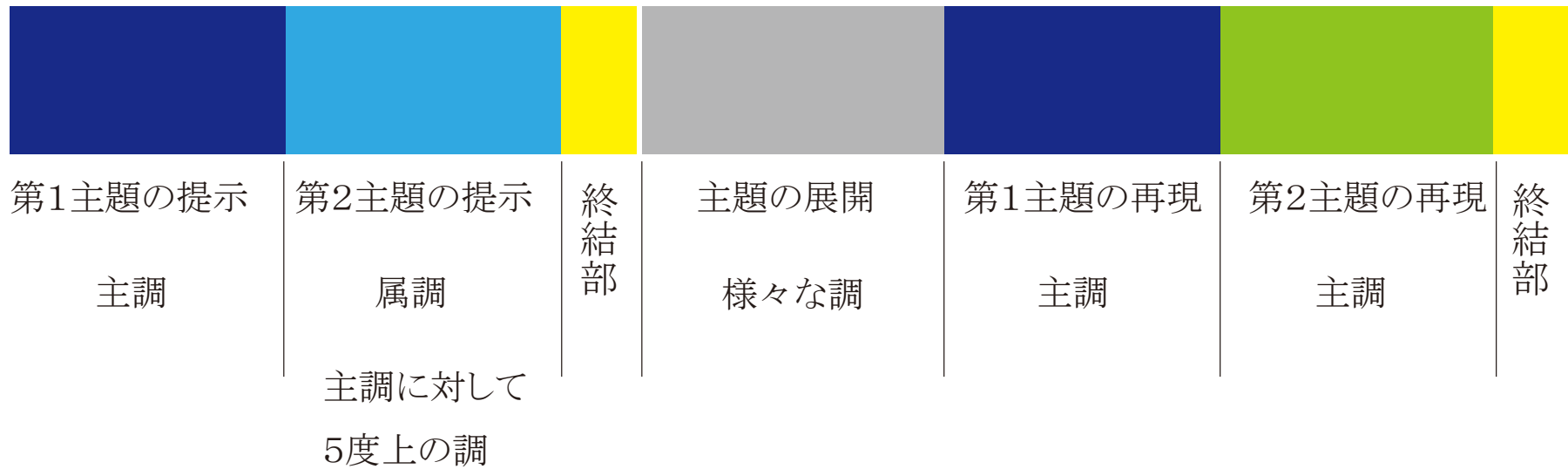
「自律芸術」としての

古典派のソナタ形式とは

提示部

展開部

再現部



古典派の作曲家



フランツ・ヨーゼフ・ハイドン
Haydn, Franz Joseph

(1732-1809)

『弦楽四重奏曲 第77番 皇帝』
～第2楽章



ドイツ国歌。

もともとは
オーストリア皇帝フランツ1世の
誕生日に捧げた曲 (1797)。

ヨーゼフ・ハイドン

(彼の生活)

- ・少年期は教会の合唱団員。しかし声変わりで解雇。
- ・まともな音楽教育を受ける機会がすくなかった
- ・10代後半からの10年間は、不遇のウィーン生活。貧困と独学。
- ・ハンガリーの貴族の宮廷楽長としての職務を30年間勤める。
- ・退職後、年金を貰いながら、さらにウィーンでの音楽活動を行う。
- ・オクスフォード大から名誉音楽博士号。

映像制作でも覚えておきたい〈強い意味〉をもつ歌 (補足)

フランス国歌

「ラ・マルセイーズ」

※ 映画『戦艦ポチョムキン』でも使用されている



映像制作でも覚えておきたい〈強い意味〉をもつ歌 (補足)

アメリカ第2の国歌

《ゴッド・ブレス・アメリカ》 God Bless America

3.11 以降に聞かれる セリーヌ・ディオンの歌が有名



Macy's 4th Of July Fireworks Spectacular FULL SHOW 2014



God Bless America - Celine Dion

7月4日の独立記念日に毎年恒例の花火と音楽のイベント、“Macy's Fireworks”でもこの曲は存在感をもって常に終盤に使用される。

映像制作でも覚えておきたい〈強い意味〉をもつ歌 (補足)

アメリカの民謡であり、独立戦争時の独立軍の愛唱歌
《ヤンキー・ドードゥル》 Yankee Doodle



日本では《アルプス一万尺》



ロマン主義

ウジェーヌ・ドラクロワ『民衆を導く自由の女神』(1830)

※ ウィーン体制による王政復古後、フランスで再度おこった市民革命
「フランス7月革命」の様子

ロマン主義の時代と主な地域

- 時代区分：1800年頃～1914年頃(第一次大戦)
- 主な地域：西ヨーロッパのみ(特にドイツ)



ルーツとしての「ロマンス」 *romance* の語

- 「口語的なラテン語で書かれた中世の騎士道物語」のこと

→ 代表例『アーサー王物語』

- 5世紀頃のイギリスを舞台にした物語。
- 素性の解らぬ少年が、剣(エクスカリバー)を金床から引き抜く
- そのことで彼は自らがアーサー王であることを知る
- 彼の家来達「円卓の騎士」らによる、戦い・冒険・恋愛の物語
- ヨーロッパ的倫理観 騎士道が描かれる → ロマン主義的精神 (無私、勇気、強さ、慈悲)

※ この物語の内容は、後の名作における題材として度々取り上げられる

- 騎士「イゾルデ」や「パーシヴァル」(ヴァーグナーの楽劇へ)

『アーサー王物語』



石に刺さった剣をぬくアーサー王



アーサー王と「円卓の騎士」たち

「アーサー王物語」を手軽に知るために

- ・ ディズニーアニメ 『王様の剣』 (*The Sword in the Stone*, 1963)

[映像] (抜粋, 4分程度)

ディズニーアニメ 『王様の剣』 (The Sword in the Stone , 1963)



対比 (美術)

1
ロマン主義
の精神

- ・「啓蒙思想的」(18C) ← → 「ロマン主義的」 (19C)
(理性、形式、均衡) (感情、無限、個性)

「新古典主義」= アンゲル



「ロマン主義」= ドラクロワ

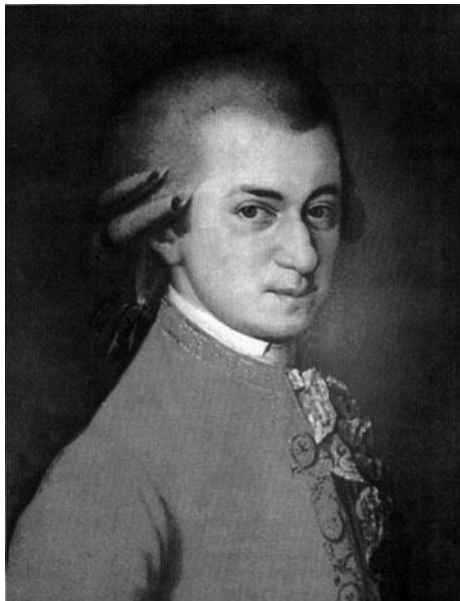


対比 (音楽)

1
ロマン主義
の精神

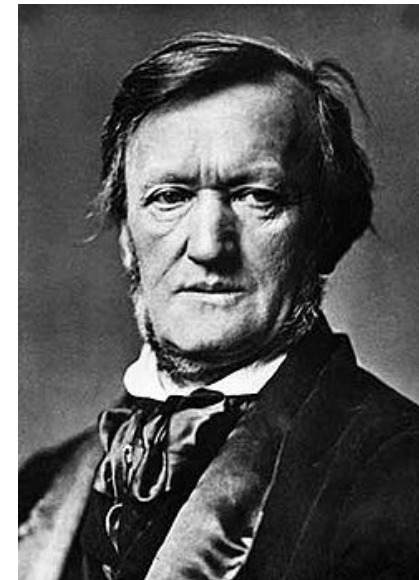
- 「啓蒙思想的」(18C) ← → 「ロマン主義的」(19C)
(理性、形式、均衡) (感情、無限、個性)

「古典派」= モーツァルト



モーツァルトの肖像画 (バルバラ・クラフト作, 1818年)

「ロマン主義」= ヴァーグナー



啓蒙思想 から ロマン主義へ

啓蒙思想 から ロマン主義へ

- 「ロマン主義的反動」

「啓蒙とは理性と進歩を旗印として、真・善・美の創造者としての人間の神格化を目論む思想であったが、おのれの要求の過大さにみずからが圧倒され、ひそかな逃げ道を準備せざるをえなくなる」 [松宮 2008: 157]

「ひそかな逃げ道」 → 合理主義精神の超越 → ロマン主義思想
「疾風怒濤」の文学運動（感情に理性と並ぶ権利を主張した、ゲーテなど、）

※とはいえ、ロマン主義思想とは、啓蒙思想の対概念ではなく、あくまで啓蒙思想の〈その内部の範囲内での反動〉である。

人間的な精神的価値 = 「美」を尊ぶ「近代芸術」

人間的な精神的価値 = 「美」を尊ぶ「近代芸術」

- ・ カントの概念「美的技術」（著作『判断力批判』にルーツあり）
 - 精神や人格を高めることにおいて価値のある技術
 - その価値とは、感性を通じて直感的に「快」がえられるもの
- ・ ただし、近代が志向するのは、
「個人としての人間の孤立した内面」における精神的価値。
(社会的存在としての人間の精神性ではない)

[国安 : 77]

→ 〈文学と音楽との融合〉 R.ヴァーグナー「楽劇」

ロマン主義的作品の傾向 (その他)

- ・「夢」(古代や未来への意識)、「靈感」(神秘主義)の重視

- ・異国情緒

※ チャイコフスキー、ヴァーグナーなど

※ いずれも「**個人としての人間の孤立した内面**」に関わる問題

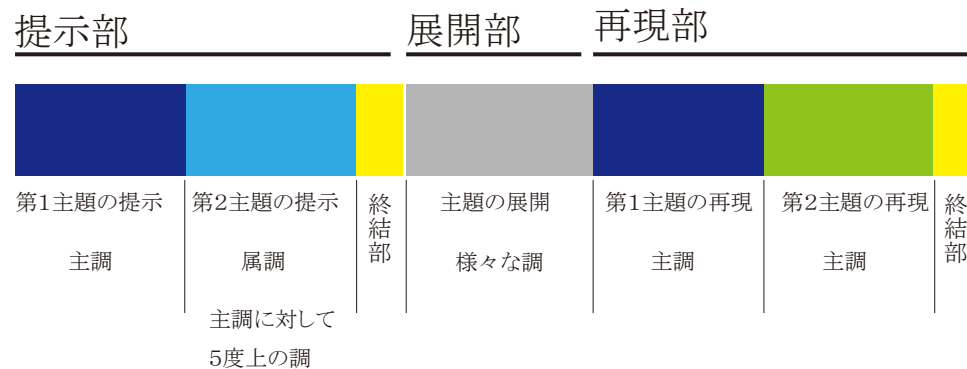
「ロマン主義の音楽」の特徴

- 自律を志向する 絶対音楽の隆盛と、形式主義の拡大
- 個人の内的世界を表現する
文学と器楽音楽との融合としての「標題音楽」や「楽劇」
- 抒情的で感情にうったえる旋律
- 和声の発達（自由な転調／半音階的和声）
- オーケストラ編成の拡大（特に金管楽器と打楽器の充実）

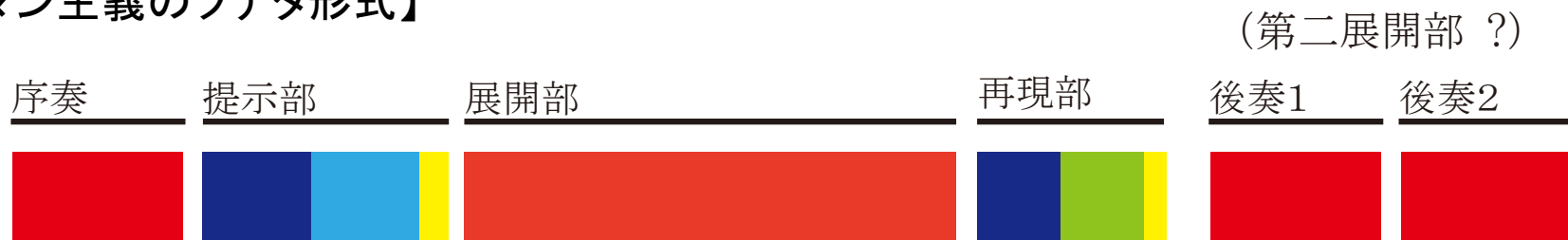
「自律芸術」としての

音楽形式(ソナタ形式)の拡大

【古典派のソナタ形式】



【ロマン主義のソナタ形式】



※展開部の充実
※序奏と後奏の充実

オーケストラの規模の拡大

【古典派】

(想定:ハイドンの交響曲)

人数:50名程度

編成:2管編成

- ※ トロンボーンとチューバは無し
- ※ 打楽器:ティンパニ1対(2個)のみ
- ※ 弦楽器:40人程

【ロマン主義】

(想定:ヴァーグナーの楽劇)

人数:100名程度

編成:4管編成

- ※トロンボーン3 /チューバ1
- ※ 打楽器:ティンパニ2対(4個)他
- ※ 弦楽器:60人程

ロマン派の作曲家



ロベルト・シューマン
Robert Schumann
(1810 - 1856)

- ピアノ曲《子供の情景》op.15 (1838)より
- ・ 第1曲「見知らぬ国」
 - ・ 第7曲「トロイメライ」



作曲家であり評論家としても有名。評論ではドイツ音楽の地位向上に貢献した。ショパンの才能を発掘したことも有名。

ロマン派の作曲家



ドラクロア作『ショパン肖像画』

フレデリック・ショパン
Fryderyk Chopin
(1810 - 1849)

ピアノ曲『12の練習曲』op.10 (1831)より
第5番 変ト長調 「黒鍵」



ポーランドの「ピアノの詩人」。
ピアノの表現様式の開拓に貢献した。

ロマン派の作曲家



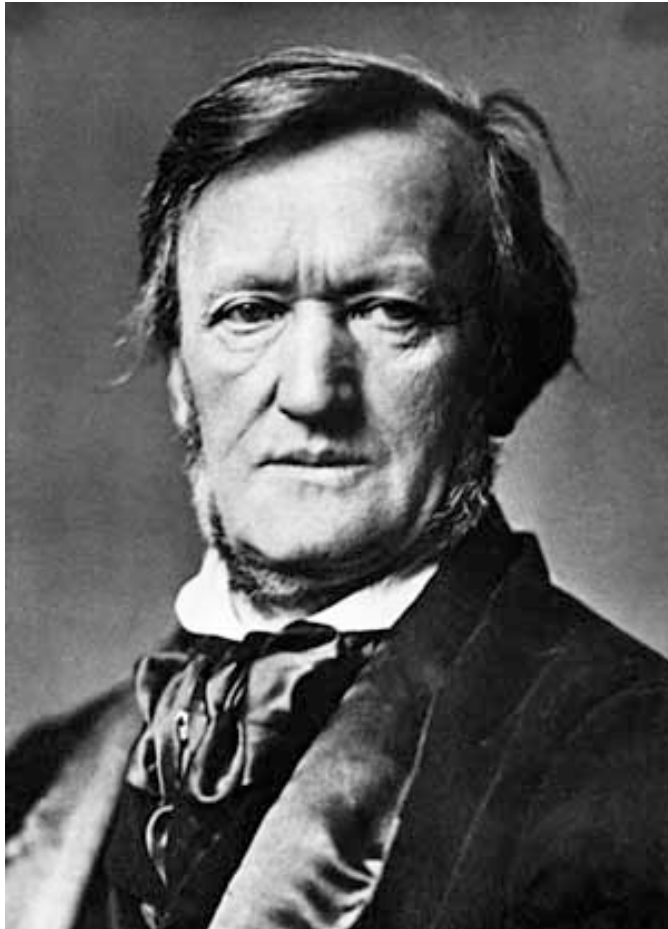
ピョートル・チャイコフスキー
Peter Ilyich Tchaikovsky
(1840 - 1893)

交響曲第6番ロ短調Op.74「悲愴」



甘美な旋律、大規模なオーケストラ、
夢のある物語を題材とした曲、など、
まさにロマン主義を代表する作曲家。
後の物語映像のための音楽にも大きな
影響を与えた。

ロマン派の作曲家



リヒャルト・ヴァーグナー
Richard Wagner
(1813 - 1883)

楽劇《トリスタンとイゾルデ》(1859) 前奏曲

楽劇《ニュルンベルグのマイスタージンガー》(1868) 序曲



古代のギリシャ悲劇の中に、理想的な「文学と音楽」の融合を見出し、それを「楽劇」という「未来のオペラ」の中で実現させた。

上の曲冒頭に聞かれる和声は「トリスタン和声」といい、調性和声の枠組みの極北といわれる。

2. 啓蒙思想への懐疑

「われわれはわれわれ自身を理解しない。

われわれはわれわれを取り違えざるをえない」

フリードリヒ・ニーチェ (1844=1900) 『道徳の系譜』 8

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- なぜ「世界を正しく認識」する必要があるのか？

人間は世界を正しく認識できるのか？

- なぜ「世界を正しく認識」する必要があるのか？

→ もし「世界を正しく認識」できたなら、
世界のあり方を人為的に操作できるから。

啓蒙思想によればそれが可能なはずであった。

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

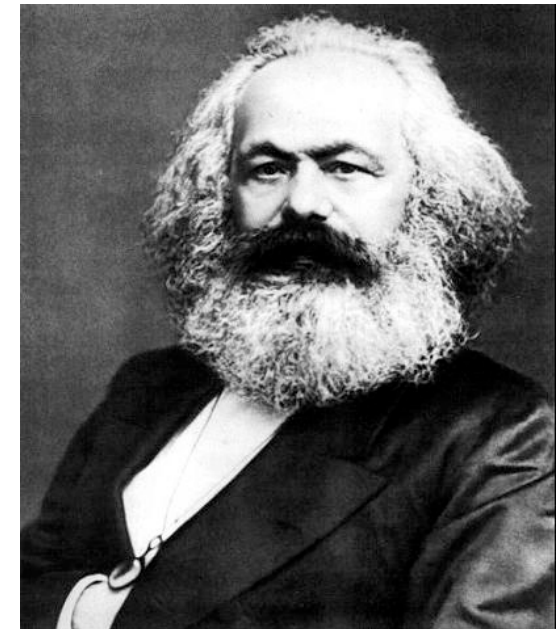
- ・ 世界を〈正しく認識〉することの含意
 - 人間の **認識能力への信頼感**
 - **唯一の〈正しい世界認識〉**の存在 (数学の答えが多様でないように)

しかし、思想家たちは、、、

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)



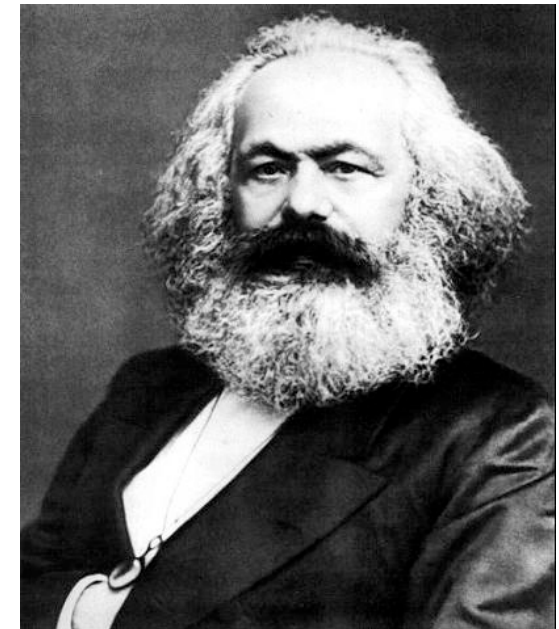
人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)

「人間は『どの階級に属するか』によって、
『ものの見え方』が変わってくる」 [内田:27]

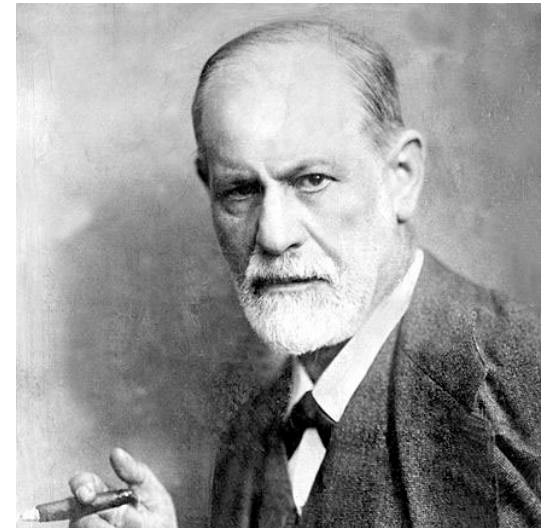
→ 人間の認識は確実ではない。
状況や他との関係性によって変化する



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ ジグムント・フロイト Sigmund Freud (1856-1939, 独)



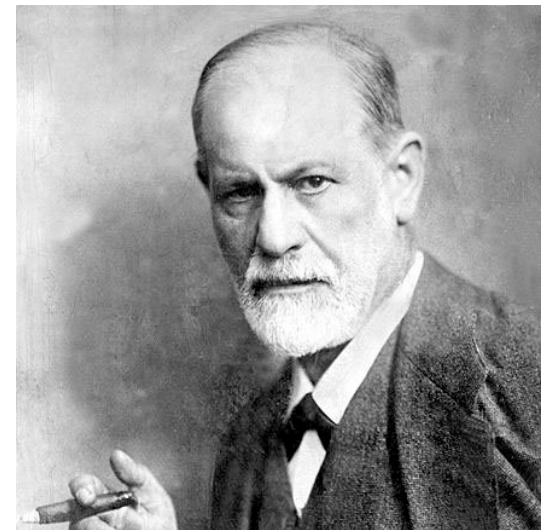
人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ ジグムント・フロイト Sigmund Freud (1856-1939, 独)

人間が**直接知ることのできない無意識の領域**が、
人間の考えや行動を**支配**する

→ **人間は人間自身のことも
知ることができない**



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ マルティン・ハイデガー Martin Heidegger (1889-1976, 独)



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ マルティン・ハイデガー Martin Heidegger (1889-1976, 独)

人間は居心地が良い状態にいと、
大衆として世間に埋没し、彼本来のあり方を見いだせず「頹落」(墮落)する。
一方で、居心地が悪くて、死が身近なほど不安な状態にいと、
自らを自己自身へとふりむかせ、本来的な自己を「取り戻す」。

(※「もし来年死ぬとしたら、あと一年どう生きる？」)

→ "ありのまま" にしていれば墮落する
= 人間が意のままに生きることへの不信



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- フェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913, 仏)



人間は世界を正しく認識できるのか？

- フェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913, 仏)

人間の観念は自由ではなくて、**言語規則の範囲で制限**されている。

ex.) 虹の色

日本 (赤、**橙**、黄、緑、青、**藍**、紫) 7色

ドイツ (赤、黄、緑、青、紫) 5色

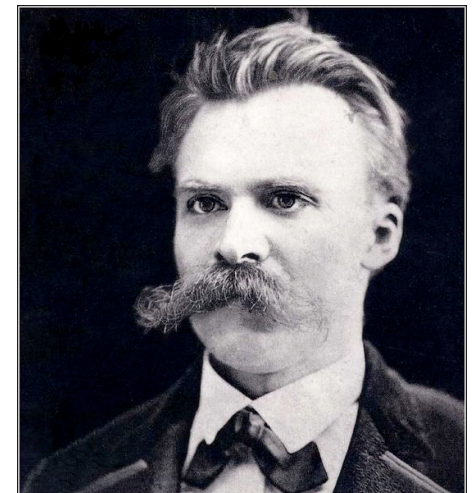
→ 自国語の**単語の有無**で世界認識が**左右**されてしまう。
つまり、それほど、人間の認識とは**自由**ではなく、
また、物事を**正確に語る**ことができない。



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ フリードリヒ・ニーチェ Friedrich Nietzsche (1844-1900, 独)



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

・ フリードリヒ・ニーチェ Friedrich Nietzsche (1844-1900, 独)

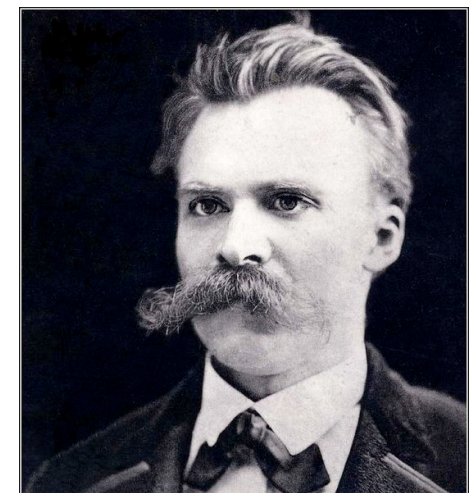
世の多くの人々は、現実の辛さから〈屈折した人〉になる。
そんな彼は屈折した世界認識から、さらに屈折した理想社会を〈求める〉。
しかし、そのような世界像は彼の自己正当化と現実逃避に導かれた
架空の世界にすぎず、現実には存在しない。
しかも、屈折が導いているため、彼を幸せにはしない。
なので、いずれ彼は失意して、ニヒリズムに陥いざるをえない。

※ 上記はニーチェ『道徳の系譜』(1887)を石井の解釈によって
まとめたもの。なので、ニーチェ自身の文章・用語ではないことに注意。
このスライド内〈〉は石井による強調。「」はニーチェが使用した用語。
〈屈折した人〉= 近代的市民のこと。〈求める〉= 啓蒙思想に導かれること。

※ 〈屈折した人〉= 現実におしつぶされて、欲しいものを、そのままの形で欲しいと言えない人のこと。
ニーチェの言葉では「弱者」。また、〈屈折〉は「ルサンチマン」

※ 〈素直な人〉= 欲しいものを、そのままの形で欲しいと言える人のこと。ニーチェの言葉では「強者」。

※ ニーチェは 認識よりもむしろ、われわれは〈素直〉になるべきだと説いた。



3. 近代芸術の帰趨

さらに 自律化する「近代芸術」

- ・ さらに「独自の内的法則」で作品を成立させることへの志向の帰結
 - 「絶対音楽」へ (ベートーヴェンなどの交響曲から 12音音楽へ)
 - 「抽象絵画」へ (セザンヌからキュビズムへ、など)
- ・ 「模倣」から 不純な要素をとりさった「抽象」へ
 - 「すべての芸術は音楽の状態に憧れる」 ウォルター・ペイター『ルネサンス』(1873)
- ・ 自律化 = 「独自の内的法則」 = 生物モデルによる「有機的生成の原理」
 - 諸部分が相互間に必然的脈略をもって結合 [するような作品]
 - 単一種子から連続的変形によって成長する [するような作品]

「芸術の非人間化」と 純粹化

「作品はそれ自身のために聴かれねばならぬ [略]。

音楽が一つの気分を我々に引き起こすための単なる手段として、

付随的にまた装飾的に応用されるようになるや否や

音楽は純粹芸術として作用することをやめる」

→ ※ 音楽において情感は不純な要素なので、それを排して
より純粹な音楽をめざすべき。

エドゥアルト・ハンスリック 『音楽美論』 (1854=1960) p.154

「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

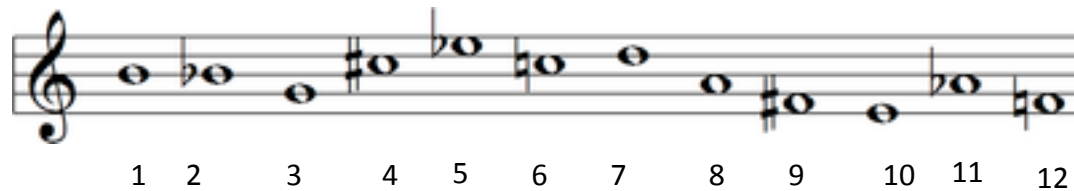
（記号によるパズルのような処理）

下の3つの六角形に続く図形を選択してください。

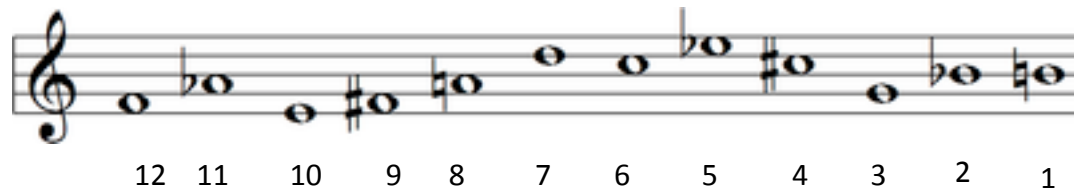
(A) (B) (C) (D) (E)

「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

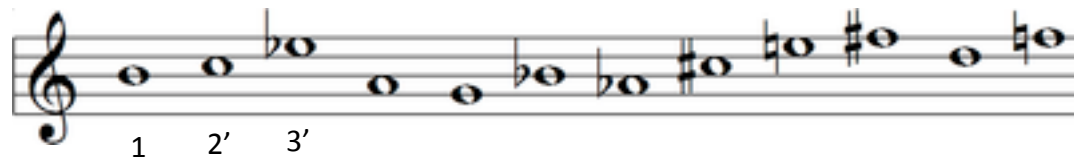
●「調性音楽」から「12音音楽」へ



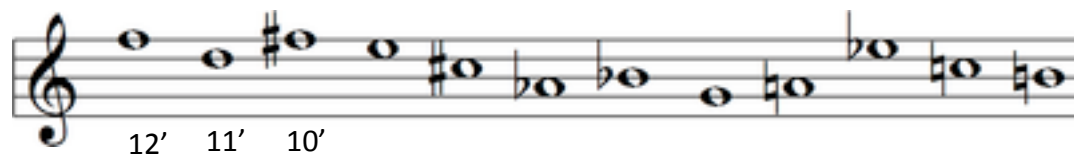
1オクターブ内の12個の音を重複なく並べて基本音列をつくる。嬉しい、悲しいなどが感じられないように並べる。



基本音列を逆行



基本音列の最初の音を軸にして、音程関係を反行



基本音列を逆行+反行

(楽譜: wikipedia「十二音技法」より)

「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

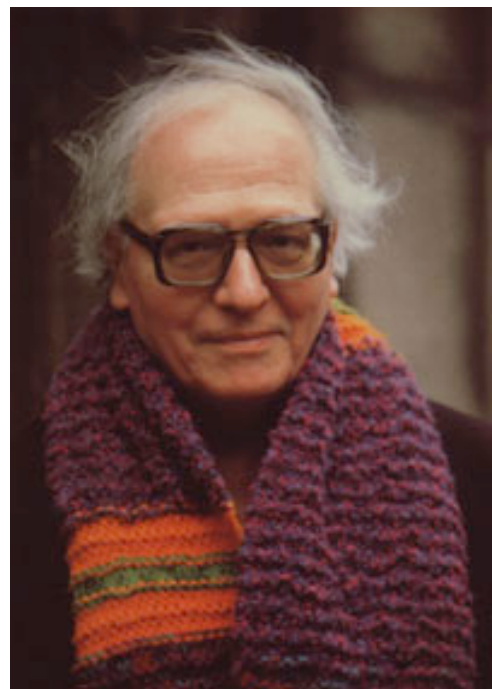
- 「調性音楽」から「12音音楽」へ



《ピアノ組曲》
Op.25 (1923)



アルノルト・シェーンベルク
(1838-1889, オーストリア)



《音価と強度のモード》
(1949)



オリビエ・メシアン
(1908-1992, フランス)

※ 12音音楽を「進歩」させた
「トータル・セリエズム」の
技法で書かれた曲

「芸術の非人間化」の過程（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨

「芸術の非人間化」の過程（絵画篇）

クレメント・グリーンバーグ (1909-1994, アメリカ) 美術批評家

【主張】

絵画に固有な要素 (メディウム・スペシフィシティ Medium Specificity) とは

- 「平面性」 (平面の板の存在)
- 「媒体」 (絵具の存在)

上記以外は絵画にとって不純なものなのではぶくべき。
このような純粹化によって「写真」との差異化を図ることができる。

→ 1950年代、ニューヨークの「抽象表現主義」へ

「芸術の非人間化」の過程（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨



ジャクソン・ポロック「インディアンレッドの地の壁画」1950年

<http://gqjapan.jp/2012/02/16/pollock100/>



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 1948年
ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 撮影: T.Ishii

Jackson Pollock

American, 1912–1956

Number 1A, 1948 1948

Oil and enamel paint on canvas

Purchase, 1950

Conservation was made possible by the Bank
of America Conservation Project.

ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 1948年
ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 撮影: T.Ishii



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 1948年
ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 撮影: T.Ishii



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 1948年
ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 撮影: T.Ishii



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 1948年
ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 撮影: T.Ishii

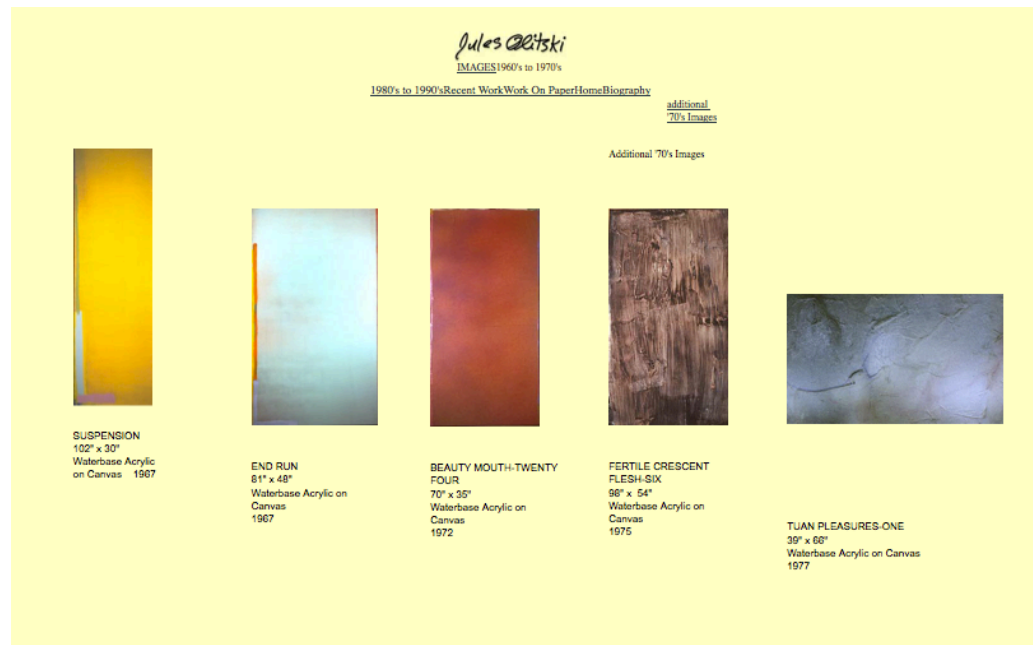


ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 1948年
ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 撮影: T.Ishii

「芸術の非人間化」の過程（絵画篇）

ジュール・オリツキー Jules Olitski (画家・抽象表現主義)

※ グリーンバーグが「現存する最高の画家」として彼の名をあげたという作家
[菅原: 115]



公式Web (?)

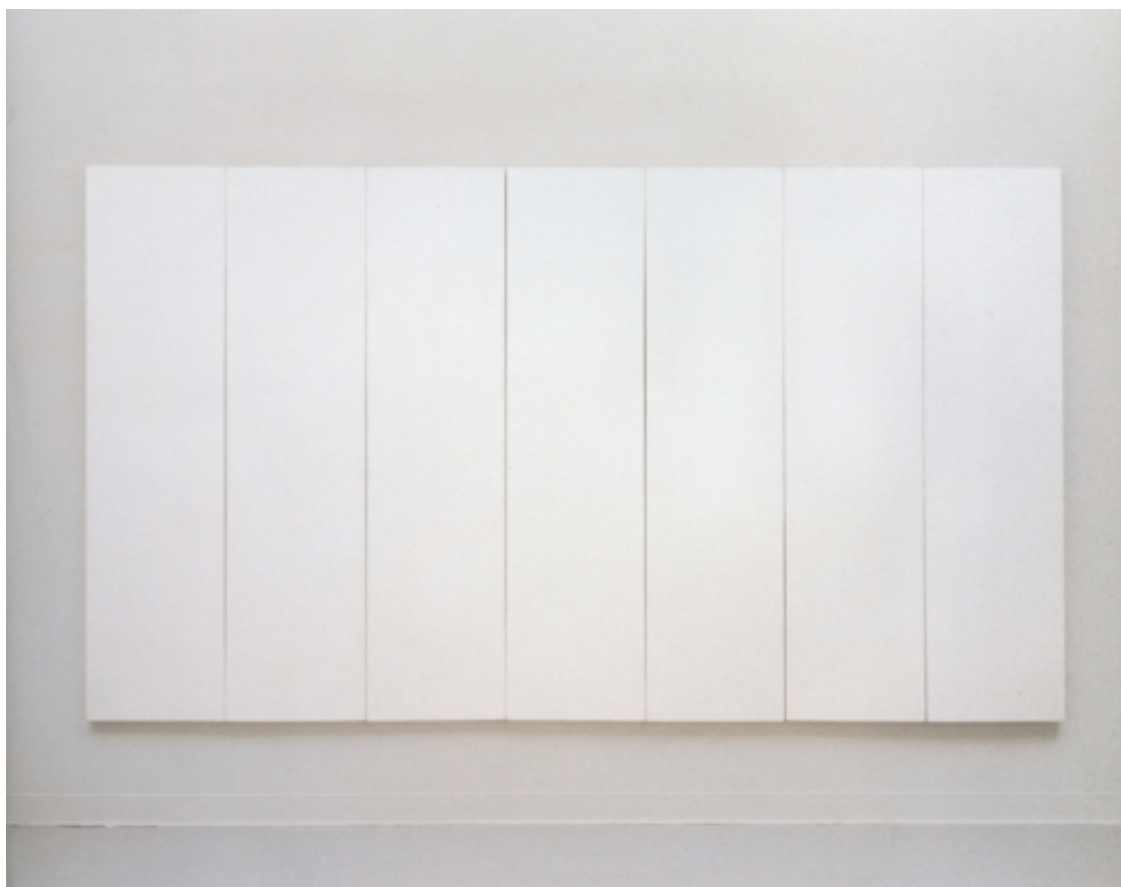
<http://homepages.sover.net/~posters/1960-1970.html>

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨



ロバート・ラウシェンバーグ 《白い絵画》1951

Robert Rauschenberg "White Painting" [seven panel], 1951. Oil on canvas, 72 x 125 x 1 1/2 inches.

http://pastexhibitions.guggenheim.org/singular_forms/highlights_1a.html

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨

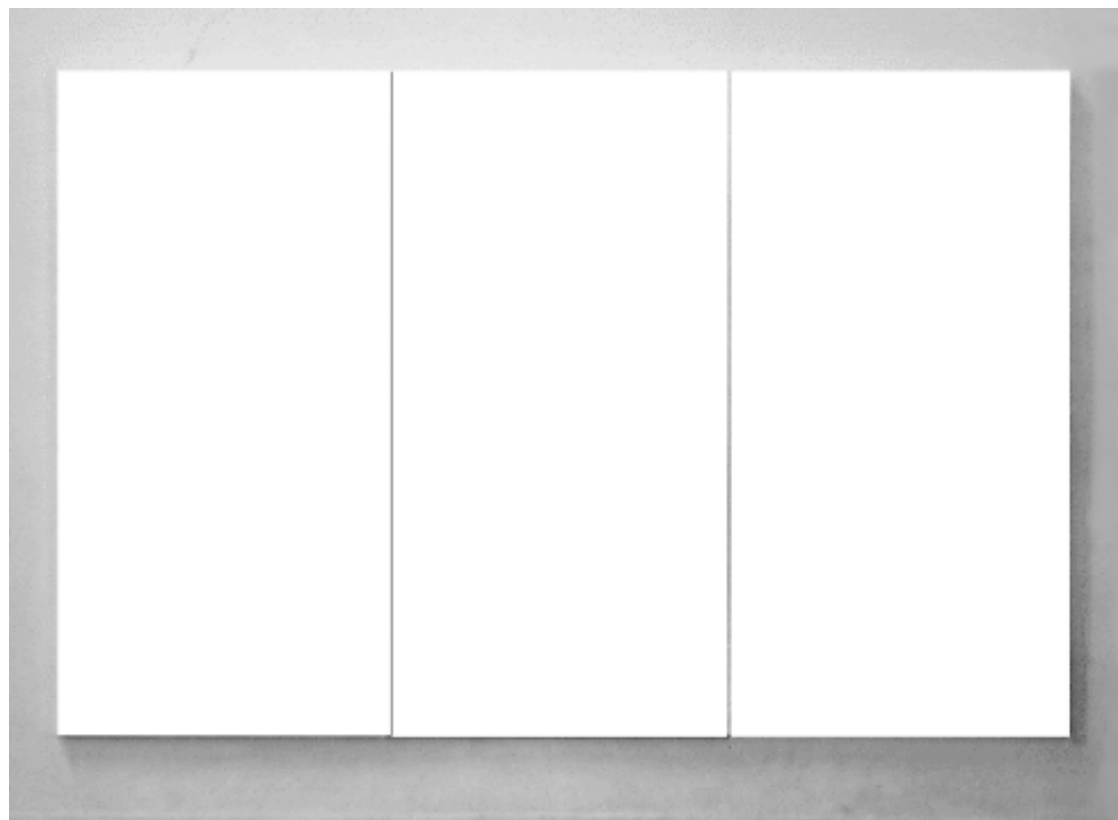


ロバート・ラウシェンバーグ
《白い絵画》1951

<http://canonpluscanon.wordpress.com/2010/03/09/robert-rauschenberg-white-paintings/>

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨



ロバート・ラウシェンバーグ
《白い絵画》1951

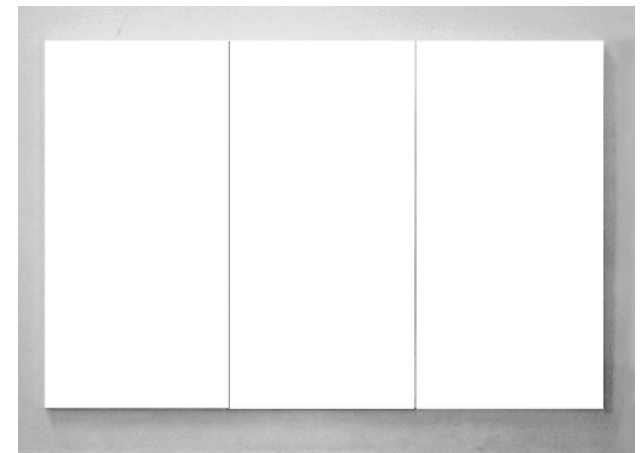
<http://monicadmurgia.com/tag/robert-rauschenberg/>

モダンアートの帰結（絵画篇）

「私に **4分33秒** の作曲させたのは、
無響室での体験と、
ロバート・ラウシェンバーグの
《white painting》だった」

ジョン・ケージ 『自叙伝』 (1989) より

http://johncage.org/autobiographical_statement.html



モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

モダンアートの帰結（音楽篇）

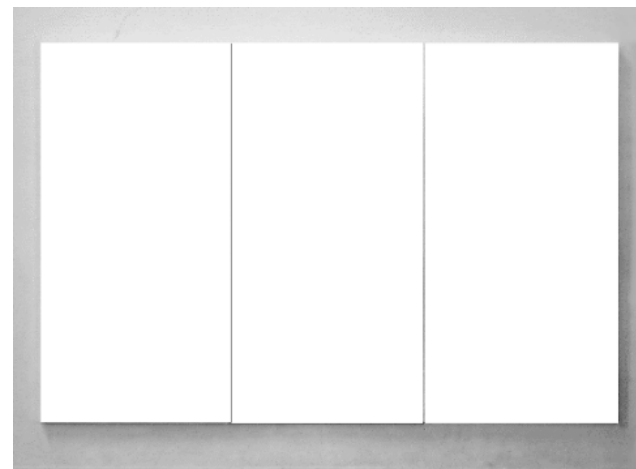


(※ いわば 純化の極地)

- ・ 3楽章形式
- ・ 第1楽章を33秒、第2楽章を2分40秒、第3楽章を1分20秒
- ・ 楽章間に休みがある
- ・ 合計時間4分33秒で〈演奏〉する

モダンアートの帰結（音楽篇）

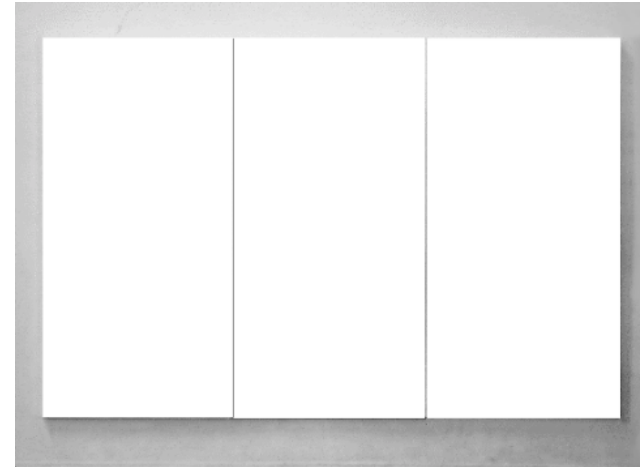
3
近代芸術の
帰趨



啓蒙主義に導かれた
「要素還元主義」、「進歩主義」を、究極に、突き詰めた結果、
音楽に音が無くなり、絵画には色と形が無くなった。

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨



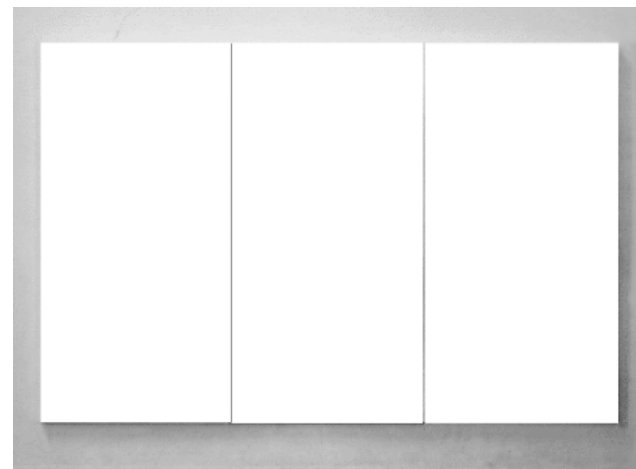
音楽に音が無く、絵画には色と形が無い。

したがって、これ以上の「進歩」は見込めなくなった。

しかしそれは「近代芸術」モダンアートの必然的な着地点であった。

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

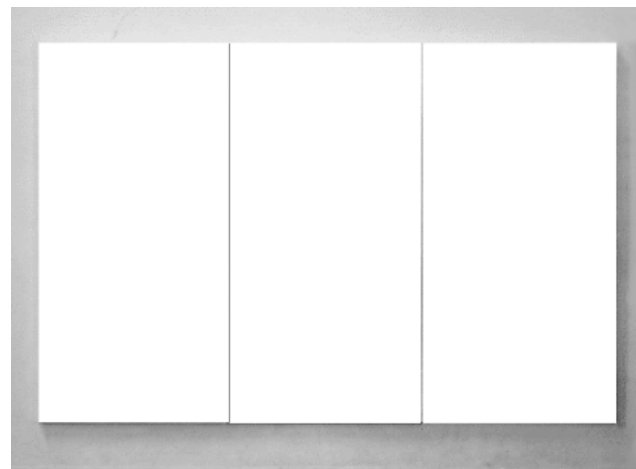


音楽に音が無く、絵画には色と形が無い。

※これは近代主義の先に「ニヒリズム」を予言した
ニーチェの示した通りの帰結とはいえないか。

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

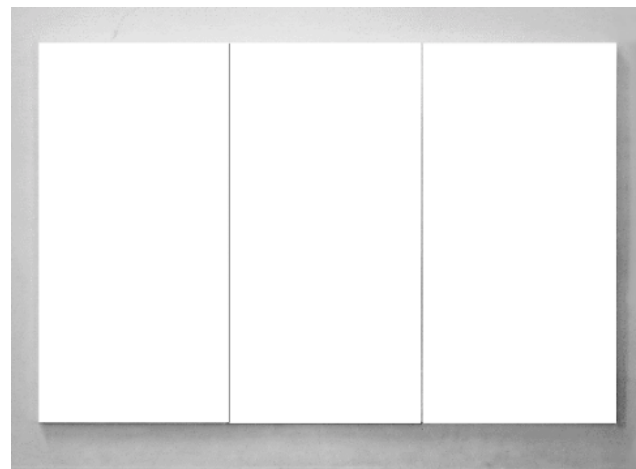


ニヒリズムとは「最高の価値が無価値になるということである」

～フリードリヒ・ニーチェ『道徳の系譜』

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨



さて、このような「近代」をふまえて、

「現代」のわれわれはどうする？

啓蒙思想の特徴 = 近代「芸術」の特徴 = 現代「アート」の方向性のヒント

- **西洋中心主義**

西欧のあり方を普遍的なものとする考え。また男性中心主義にもつながる。

- **要素還元主義**

分類し、可能な限り細部に切り分けることで、物事の〈本質〉をすることが出来るとする考え
芸術の「本質」をさぐるために、他の表現要素にたよらない〈自律的な芸術〉への志向にも。

- **進歩主義**

新しいものは良く、古いものは良くないとする考え。
われわれは、〈真理〉に到達する歴史上の過程にいるという考え。

- **人間中心主義**

人間の理性によって自然を制御して〈真理〉に到達しようとする考え

参考文献, より深く知るために

- 渡辺裕『西洋音楽演奏史序説』春秋社
- 佐々木健一 (1995)『美学辞典』東京大学出版会
- 佐々木健一 (2004)『美学への招待』中公新書
- 小田部胤久(2008)『西洋美学史』東京大学出版会
- 小田部胤久 (2001)『芸術の逆説: 近代美学の成立』東京大学出版会
- 西村清和 (1995)『現代アートの哲学』産業図書
- オルテガ・イ・ガゼット (1925=1968)『芸術の非人間化』荒地出版社
- E.ハンスリック (1854=1960)『音楽美論』渡辺護訳、岩波文庫
- F.ニーチェ (1887=1940)『道徳の系譜』木場深定訳、岩波文庫
- 菅原教夫 (1994)『現代アートとは何か』丸善ライブラリー
- 竹田青嗣 (1990)『自分を知るための哲学入門』ちくまライブラリー
- 竹田青嗣 (1992)『現代思想の冒険』ちくま学芸文庫
- 橋爪大三郎 (1988)『はじめての構造主義』講談社現代新書
- 内田樹 (2002)『寝ながら学べる構造主義』文藝春秋
- 村田誠一 (1999)「近代の終焉?: 芸術的表現の可能性と限界」、神林恒道ら編『芸術における近代』ミネルヴァ書房